
キュアグラス ～ただ雑草のように～

プシェミスル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キュアグラス くただ雑草のようにく

【Nコード】

N5548Z

【作者名】

プシエミスル

【あらすじ】

あてもなく、たださすらいながら戦い続ける一人の女がいた。人から好かれず、また彼女も好かれようとはしない。彼女は一体何を望むのだろうか。その名はキュアグラス。雑草という名のプリキユア……。

プロローグ

「わ・・・わかりましたあ！もう、二度としませんから命だけはあ
~~~~~！！！」

「本当ね。もし今度繰り返したなら、その命を・・・。」

「ほ・・・本当ですってば~~~~~！！！」

私が今問いただしているのは、あるスーパーマーケットから万引きをしようとした少年だ。偶然それを見た私は少年に『ある程度』制裁を加え、万引きを未然に防いだ。彼も二度としないと誓った。本当かどうかは疑わしいが・・・。

私の名前は芝草秋香<sup>しばくさ しゅうか</sup>。歳は15、中3だ。我が家は転勤が多い家で、ほぼ1年ごとに転校を繰り返している。だから私には友人がいない。友人をつくる気もしない。親から友人をつくれと言われているが、正直うっとうしい。つくってもすぐに疎遠になってしまうのなら、そんなものはいらない。

そんな私は現在、四つ葉町という町に住んでいる。別名クローバータウンと呼ばれているそうだが、私にはどうでもいい事だ。

今日は日曜日、私はとぼとぼと町を散策している。でかい怪物が跋扈している以外は何とも平穏な町だ。・・・ん？でかい怪物？

## 人物紹介

芝草 秋香 （しばくさ しゅうか）

1996年7月21日生 15歳

両親と自分の3人家族

明るくて社交的な他のプリキュアたちと違い、あくまで孤独を貫き、誰とも関わろうとしない少女。口数も少なく、つい毒を吐いて周りに嫌悪感を与える。

## プロローグ（後書き）

四つ葉町で出会った4人のプリキュア。キュアグラスとして共に戦ったものの、秋香は彼女たちとは関わろうとしない。己は雑草、雑草なのだから。

次回「孤高」 奴とは、絶対に関わらないほうがよい。

## 孤高

四つ葉町を襲っている巨大な怪物。それに立ち向かっているのは、私と同じ年代であろう4人の女。その奇怪な容姿。あの女たちも私と同じ『プリキュア』なの・・・かな。

「エエエエエエエエイ！！！！！！！！」

巨大なツインテールをした金髪の女が、怪物に向かって飛び膝蹴りをかます。それに続いて他の女たちも攻撃する。

『プリキュア・クアドラブル・キーーーーッッッッ！！！！！！』

4人の息の合ったキックが怪物にダメージを与える。だけど怪物にはさほど効果は無いみたいだ。逆にその圧倒的な力で女たちを圧倒する。

・・・つたく、せつかくの日曜日をこんなつまない事で潰さないで頂戴。

『チェンジ・ザ・キュアグラス！』

服のポケットから、変身アイテム『グラス・ロッド』を出して、私はあいつらと同じプリキュアへと変身する。

『我は無限の生命の証、キュアグラス！！』

・・・雑草とは生っても生っても生えてくるもの。だから無限の生

命なのだ。

「・・・・・・・・ツツ!!」

バツシーシーシーン!!!!

「ウオオオオオオ!!!!!!!!」

私は無言で怪物にパンチをお見舞いしてやる。急所に当たったのか、怪物が地面に倒れのた打ち回る。

「た・・・・・・・・助かったあ・・・・・・・・。」

「もたもたするな、もう立ち上がってるぞ。」

「え？」

ベシツツ!!!!!!

警告した時にはもう遅かった。怪物はもう立ち上がり、ツインテールの女を殴り飛ばした。

「ピーチ! 大丈夫!？」

へそを出した女と赤い服の女がピーチと呼ばれた女に駆け寄る。隙を見せたらだめだったのに。

「私がやるしかないか。」

私はロッドを装備し、自らの技を発動させる。

『地上に生える無数の草の魂よ、奴にからみつき、動きを封じよ。』

『プリキュア・グリーングラス・ロープ!』

ロッドの先から草で編んだロープが放たれ、怪物の体をごんじがらめにし、動きを封じさせる。

「動きが止まった・・・?」

「何もたついてるの? 止めを刺せ。」

「・・・う、うん!!」

ピーチとその他の連中も、必殺技を繰り出した。

「クローバーボックスよ! 私たちに力を貸して!!」

「プリキュアフォーメーション! レディ・・・ゴー!!」

「ハピネスリーフ、パイン!」

「プラスワン、フレアーリーフ、ベリー!!」

「プラスワン、エスパワーリーフ、ピーチ!!」



「プラスワン、ラブリーリーフ!!!!!!」

『ラッキークローバー・グランドファイナーレ!!!!!!』

大きなクロウバーマークが怪物を結晶で封じ込める。

「ハ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
! ! ! ! !」

怪物は徐々に弱っていき、やがて浄化されたのか消滅した。

おいおい、もう昼過ぎじゃない。1日の半分が終わった。つまんない事に関わるんじゃない。さ、散歩の続きといこうかな。

「待って！」

変身を解き、元に戻った奴らの1人、キャンディの包みみたいな髪型をした子が来る。

「さつきはありがとう。あなたがいなかったらどうなったか。あ、あなたもプリキュアなの？」

私は無視して散歩に向かう。こいつらを相手する道理なんて無いから。

「私、桃園ラブ！あなたは？」

くどいなあ。私は歩んでいた足を止め、後に振り返る。そして・・・。

「ッ!!」

バキィッッ!!

「タッハアア!!!!」

ラブと名乗った子の顔面を、思いっきり殴り飛ばした。

「ラブ!!」

「ラブちゃん!!」

「ラブ、大丈夫!?!」

「う・・・うん何とか・・・。」

「ちょっとあんた!何て事するのよ!!」

「今すぐラブに謝って!!」

青い髪をしたモデル風の子と藍色の髪の子が突っかかってきた。面倒な連中だ。

「私、馴れ馴れしい人間は嫌いな。だから殴ったの。」

「な・・・何よその態度!!」

「初対面の人間にそこまで親しくする義理は無いわ。そうでしょう。」

「・・・・・・・・あんだ・・・・・・・・!!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

言いたい事は言った。呆気にとられている奴らを背に、私は散歩の続きに入る。無駄な体力を使った。

「・・・・・・・・何なのよあいつ、人を助けておいてあの態度は・・・・・・・・!!!!」

「それに一言も謝らないでにおいて。今度合ったら・・・・・・・・。」

「ラブちゃん、鼻血が!」

「こ・・・・・・・・これ位大丈夫・・・・・・・・だよ。」

明くる月曜日、私は今度転入する『公立四つ葉中学校』の門をくぐった。クラスは3年の4組目。

「今日からこの4組に転入した、芝草秋香さんだ。」

紹介をされ、席につかせられる。クラスメートから質問はされたが、適当にあしらってやった。

「転入生？」

「3年の芝草秋香さんですって。」

「どんな人だろう。ねえせつな、見に行ってみようよ！」

「ちょ、ちょっとラブ待って！」

「あ、あの人かな？・・・て。」

「あ・・・あいつ！昨日ラブを殴り飛ばした・・・！」

「え・・・そうだっけ？顔良く見ていなかったからわかんないなあ。」

「

「ラブ、あまりあいつには関わらないほうがいいわ。」

「そ・・・そうかなあ。」

「顔も全然笑っていないし、一言もしゃべろうとしないじゃない。放っておきましょう。」

「で・・・でも・・・。」

同じプリキュアなのにとラブは言おうとしたが、せつなに引っ張られ、言えなかった。

「どうせまた転校するんだもの。」

自分に言い聞かせるように、私はつぶやいた。

## 孤高（後書き）

学校に転入した秋香に関わろうとするラブ。軽くあしらってやる秋香。

いまの彼女には、ラブはしつこく付きまとうシラミでしかなかった。

次回「憎い奴」しかし、それでも女は興味を持たれる。

## 憎い奴

ポカポカポカ・・・

昼休みになった。私は学校の校庭の木陰でゆっくり昼寝だ。ここなら誰も来る事は無いだろうし、落ち着いて眠れる。

クー・・・クー・・・

今日もいい天気だ。毎日こんな日が続くといいが・・・。

「・・・ささーん・・・。」

？

「・・・ばくささーん。」

??????

「芝草さーん！」

・・・何だ昨日私がぶん殴った、ラブ・・・とか言う子だったっけ？

「何しに来たの？」

「芝草さんが1人でどこかに行くから、つい心配になっちゃって、ついて来たの。」

「戻って。」

「どうして？」

「私今昼寝中なの。邪魔しないで。」

「でも……。」

「戻って。」

「………うん。」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

そう言うのと、ラブはとぼとぼと戻っていった。

「昼寝の続きね。」

私は再び眠りこける。

「………。」

「どうしたのラブ？ボーっとして。」

「……何でもない。」

「そう……。」



今のラブには、せつなという子の言葉も入ってこないようだ。

放課後になった。私はクラブ活動を何もしていない。ただまっすぐ家路につく。

「・・・・・・・・・・ふう。」

私はため息をつく。その時だった。

「芝草さん！」

またラブが来た。今日はやたらと絡んでくるな。

「帰りにドーナツ食べていかない？」

「いない。」

「そんなつれない事言わないで行こうよ。」

「くどいわね！ いないわ！」

「嫌だと言っても連れて行きます！」

一体どこからこんな力が出るのか。ラブは私を引きずって行った。抵抗を試みたがラブの力が上だった。

たどり着いたのは1台のバンの前だった。屋台のドーナツショップか。ふうん、案外小洒落たお店ね。あら？先客がいるみたい。

「ラブちゃん？それにその人・・・。」

「あーっ！あんた昨日ラブを殴った人じゃない！！」

バンの前の簡易テーブルに座っていたのは、昨日怪物と戦っていた子たちだった。まずいわね、こいつらと関わると面倒な事になるわ。さっさと退散しましょ。

「この人も、ドーナツが食べたいって言うから仕方なく連れてきちゃった。」

ちよっと！私そんな事一言も言ってないわ！！

「・・・帰らせてもらうわ。」

退散しようとしたが、すぐにラブに捕まった。抵抗しようとしたけれど無駄だった。諦めて私は相手する事にした。はぁ・・・帰りたい。

テーブルの上に5人前のドーナツが並べられた。皆おいしそうに食べている。私は全く手を付けない。付ける気もしない。

「どうしたの芝草さん。食べないの？」

「食べない。」

「おいしいのに。」

「おいしくても。」

「食べたら幸せになるのに。」

「もう充分幸せよ。」

「嘘だよ、だって顔が笑ってないもん。」

「幸せだったら笑ってなきゃいけないの？」

「・・・・・・・・」

ラブは黙り込む。やっと諦めてくれたか。

「ねえ、芝草・・・さん？」

おとなしそうな茶色の短髪の子が聞いてきた。仕方なく相手してやる。

「あなたの名前は何て言うの？」

「・・・・・・・・秋香。芝草秋香。」

「秋香さん……。いい名前ね。」

「褒めても何も出ないわ。」

「私は祈里。山吹祈里です。」

「覚えておくわ。」

「歳は？」

「15。中3。」

「じゃあ私たちより1個上級生なのね。」

「そうね。」

そこまで言うと、今度は綺麗なモデル風の長髪の子が質問してくる。

「芝草秋香さんだったわね。私は蒼乃美希、よろしくね。」

「。。。。。」

「家族は？」

「両親と私。」

「友達は？」

「いない。」

「い、いらないって・・・。」

「友達なんて、つくってもいずれは嫌いあうか、忘却の彼方よ。」

「・・・昨日私たちが戦っている時に、あなたが援護してくれた。どうやらあなたもプリキュアみたいね。あなたの力、かなりのものだと思うの。」

「それが？」

「私たちに協力してくれない？」

「断る。」

「どうして？」

「馴れ合うのは嫌いだから。」

「な、馴れ合うって・・・。」

「それに。」

「それに？」

「1人のほうが、かえって好都合だから。」

「・・・・・・そう。」

「そう。」

「・・・・・・・・ねえ、秋香さん。」

「何？」

「昨日から見ているけど。あなたって、氷みたいな人ね。」

「氷？」

「そう、温かみの無い冷え切った氷のようだよ。」

「・・・違うわ。私は雑草、どこにでも生えてどこにでも邪魔になる雑草よ。」

「雑草？」

「そう、雑草。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

そこで会話は途切れた。

「もういいでしょ、私帰るわ。忙しいから。」

ドーナツに全く手を付けず、私は家路につく。

数百m離れた時、ラブがこっちに向かって大きな声を出した。

「秋香さぁーん！困った事があったらいつでも来ていいからねー」

「!!!!!!」

困った事なんて無い。

ようやく家に戻れた。日はもう沈んでいた。

ガチャリ

「ただいま。」

家に入っても誰もいない。両親は共働きで、いつも帰って来るのが遅い。

モグモグ

夕飯はいつも1人だ。静寂の中での夕飯は落ち着く。その後お風呂を入れて、洗濯物をたたんで、お風呂に入って、寝る。これが私の日課だ。

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z

明日も学校だ。寝坊すると悪いからさっさと寝よ。

## 憎い奴（後書き）

相変わらず突っかかってくるラブ。何故彼女はそこまで過剰なのだろう？

そして何故か秋香は、他の子たちの面前に立たされていた。苛立ちながら・・・。

次回「紹介」もう何遍も言ってきた。



## 紹介

ワイワイガヤガヤ……

今日も一日が終わり、放課後になった。私がこの学校に来て数週間、最初のうちは物珍しさにしゃべってきた人間が多かったが、今では誰一人として近寄る人間はいない。むしろ煙たがられているようにも感じる。それでいい、私にはそれで十分だ。草とは本来煙たがれるものだ。

学校内やグラウンドでは部活動が行われている。私はどこにも所属していない。部活をやる気にもならない。授業が終わったら、まっすぐに家路につく。

最近暇だ。キュアグラスとして戦う日もめっきり無くなり、暇を持て余している。まあ、平和が何よりだが。

数日後の日曜日、私は家で遅寝している。たまにはこんな日があってもいいだろう。

ピンポン！　ピンポン！！

誰よ、日曜日からうるさいな。

「秋香さんいますか？一緒に遊びに行くんですけど。」

……本当にうるさい奴が来た。

うるさい奴Ⅱラブに付き添われ、私は無理やり近くのショッピングモールに行かされた。ラブが言うには私を紹介したいと言う。まったく……。

「お待たせ皆、連れて来たよ！」

そこにいたのは私と同年代であろう子たちが大勢いた。揃いも揃ってこちらを凝視している。にらみ付ける奴もいたが。

「ほら秋香さん、皆にご挨拶。」

渋々挨拶する。

「……秋香。芝草秋香よ。」

そしたら他の子たちが一斉に名前を言ってきた。はっきり言って耳障りだ。

「秋香さんもプリキュアだって聞いたんですが、本当なんですか？」

活発そうな金髪の子が聞いてきた。さっき……なぎさ……とか言っていた子だ。

「キュアグラス。無限の生命の証。」

「どうして無限の生命が雑草なんですか？」

「知りたきや自分で実際に草を見て考えろ。」

「・・・・・・・・ムツ。」

「た・・・多分、雑草は抜いても抜いても生えてくるから無限の生命・・・なんじゃないでしょうか。」

近くにいたつぼみとか言う子がフォローする。ふうん、勘がいいのね。

「勘がいいわね、あんた。」

「草の事はあまりわかりませんが、花と同じように、草もまたひとつの生命ですから。」

ラブが言うには、このつぼみはキュアブロッサムというプリキュアになるらしい。桜花か、なるほど覚えておこう。

「つぼみ、何かこの人陰気臭いね。」

「え・・・・・・・・えりか！？何て事を言うんですか！！」

「だあゝって、顔は笑ってないし、睨むような目つきだし、口は悪いし。ゆりさんより性格硬そうだなあって。」

バキィッ！！！！

その刹那、私はえりかを殴り飛ばしていた。瞬間、胸倉を掴んだ。

「チビスケのくせによくもまあぬけぬけと。少しは自分の立場を考

えろ!!」

「チ……チビスケですってえ……!!!!??」

「チビスケだろうが。その背の低さが何よりの証拠だ。」

ポイツ ドサツ

私はえりかを放した。えりかは私を涙目で睨んでいたが、つぼみがそれを何とか抑えている。

「てんで話にならない。帰らせてもらうわ。」

さっさと私は帰ることにした。ところがそうは問屋が卸さなかった。今まで彼女たちが倒してきた勢力の残党がモールを襲ったのだ。ホシナーと……言ったか。彼女たちはプリキュアに変身し、戦いを始める。私も成り行きでキュアグラスに変身した。

ボコツビシッドコツ……

プリキュアたちが束になってかかってでも残党にはダメージを与えられていないみたいだ。見てられないなあ。

「お前達は下がってろ。こいつは私が片付ける。」

「で……でもグラス一人じゃ。」

「私が片付けると言ったんだ。邪魔をするな、そこをどけっ!!」

私は戦っていたプリキュアたちを敵から離れた場所に次々に投げ飛ばした。

「いったああ・・・!!」

投げ飛ばされたから相当痛いだろう。しかし私にはお構いなし。

「ホシイナーだったかしら？お前の相手はこの私だ。」

私は単独で挑んだ。こんな雑魚には私一人で十分だ。

「ハアアツツ!!」

相当相手を弱らせただろう。敵の攻勢が大分弱くなった。

「店じまいだ。」

私は最後の締めに入った。

『地上に生える無数の草の魂よ。奴にからみつき、息の根を止めよ！』

グラス・ロッドが変形し、無数の棘が生えた荊のつりとなった。ホシイナーに向かって放ち、全体をぐるぐる巻きにする。

『プリキュア・グラス・バニッシュュ!!!』

つるはホシイナリーの体を締め付け始めた。どんどん奴の体は締め付けられ、最後はブシュツと音を立てて四肢がばらばらになった。

戦いを終え、元の姿に戻る。これ以上構ってられない、帰ろう。

「秋香さん!」

戦闘中にキュアドリームと名乗っていたのぞみ……が聞いてきた。

「さっきの戦い、どうして私たちを投げ飛ばしたんですか!」

……

「それにあんなじわじわと痛めつけて倒すなんて。何とも思わないんですか?」

……

「どうして1人で戦おうとするんですか!? 答えてください!!」

……

「自分で考えろ、この能天気が。」

そう言うと、私は立ち去った。他の連中は黙って見るしかなかった。

「な・・・何なのよあいつ、感じ悪過ぎよ！」

「あの人には血も涙も無いのかなあ。」

「これ以上関わるのはやめたほうがいいかもね。」

「・・・・・・・・あの人、どうして関わりたがらないんだろう。」

何だか遠くで聞こえる。大方私への不満だろう。勝手に言っている、どれ一つとっても褒め言葉だ。私はその程度の人間なのだから。

## 紹介（後書き）

ある時の彼女はしぶとい雑草。またある時の彼女は雪上に生える枯れ草。

どちらをとつてもやはり雑草。

次回「草踏み」これが我が役目



## 草踏み

ヒュウウウウウウ・・・

外は吹雪いている。私は自室でストーブをたいて過ごしている。一人で過ごす日は、傍から見れば寂しく見える。だが私には心地よいひと時なのだ。

「私は所詮雑草。誰も愛せない、誰からも愛されない雑草。」

・・・私は一体何を言っているんだろ。その時、過去の記憶が一瞬蘇る。

「・・・・・・・・!!!!!!」

「秋香ちゃん!待ちなさい!!!!!!」

「・・・・・・・・!!!!!!」

あれは保育所の頃、私はクラスに馴染めず、何度も脱走した事があった。保育士の目を盗んで脱走した。しかし途中でつかまり、また保育所に連れ戻されたのだ。

「間違っているのはお父さんたちの方だろ!! こんな家出てってやる!!」

「そうか!そこまで言うのならさっさとこの家から出て行け!!二度と帰ってくるな!!」

小学生の頃、些細な揉め事から始まった口げんか。次第にエスカレートし、遂には家出するだのしないだのにまで発展した。しかし結局私のほうが折れ、収束した。

「何か変な奴だなあ……。」

「関わらないほうがいいよ。」

「目つきが悪いし、気持ちが悪いしね。」

「死ねばいいのに……。」

中学生になり、転校を繰り返すようになる。耳に入るのは私への陰口と悪口。それはどの学校でも同じだった。そして私は考えた。

「……私は、存在してはいけない人間……。」

そんなある日、私に何者かが語りかけてきた。小動物のような奴だった。

『芝草秋香、お前はこれから一本の草、キュアグラスとして戦うのだ。』

「何者なのよあんた。それにキュアグラスってどういう事？」

『今この世界では、過去にプリキュアが倒してきた勢力の残党がはびこっている。お前はキュアグラスとなり、残党を一掃してこの世界を守るのだ。』

「馬鹿馬鹿しい。帰る。」

『お前の存在とは何だ……？』

「……私の存在？」

『お前の願いは何だ……？』

「願い。願いは……。」

私はプリキュアとなった。最初のうちは断っていたが、小動物がしつこくプリキュアになるよう言い続けたので、仕方なくなった。

「私は一体何者なんだ？」

「私はこの世界に必要なのか・・・？」

「私はどうしてプリキュアになったんだ？」

「私になる必要はあったのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

コツチコツチコツチ

現実に戻る。時計の音だけがする静寂。私はいろいろなことに頭をめぐらせている。プリキュア・・・アニメでは見た事があるが、現実存在するとは知らなかった。しかし彼女らは二人以上のチームを組んでいる。それに対し私は一人だ。ひとりでもプリキュア・・・なあってな。

皆画面ではいい子たちばかりだ。笑顔も見せる。何よりも人当たりが良い。私は真逆だ。人当たりが悪い。いつも仏頂面だ。

彼女たちは執念深い。どうしてそこまで執念深いんだ？そこまで献身的なんだ？私だったら身に危険を覚えたら自分の命を最優先する。他人を助ける為に自分が死ぬのはまっぴらごめんだからだ。

・・・・・・・・！！！！

その時、結論が出た。

「だから、キュアグラスなのか……。」

グラス、雑草。植物の成長を妨げる厄介者。だから抜かれる、刈り取られる運命。そうか……そうだったんだ。

「彼女たちを不幸へと渡らせず、明るい未来への橋をかける。それが私、キュアグラスの役目……。」

希望の陰には数多くの尊い犠牲がある。しかし少なければ少ないほど良い。いや、一人で十分だ。時代よ、どうか彼女らの未来に希望と夢があらんことを。私は雑草のように刈り取られてもいい。皆から捨てられてもいい。彼女らの為ならこの命を捧げていい。犠牲は私一人で十分だ。私一人の命は、彼女らの夢と希望よりも軽いのだから……。」

「さて、寝よう……。」

ようやく見つけた、私の役目。それを終えたら、この身を……。

## 草踏み（後書き）

自らの役目を見出した女。それを妨げる巨悪が目覚めようとした。  
た。

女は役目という道をひたすらに歩き、そして走り出す。

次回「走者」

雑草よ、たくましくあれ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5548z/>

---

キュアグラス ～ただ雑草のように～

2012年1月13日21時54分発行